

ある中学生の戦中日記

葛城 峻

昭和十八年四月に私は県立横浜第三中学校（戦後の学制改革で五年終了生が横浜緑ヶ丘高校一期生に横滑り）に入学した。覚悟していたが先輩たちの黒づくめの学生服と違い国防色のズボンにゲートル、帽子も上級生の黒ラシャでなく野暮ったいスフの戦闘帽。おまけに上着のボタンはセトモノと来た。

陸軍少尉・中尉の配属将校が数人いて「教練」という正科があったが、一年生は不動の姿勢や号令のかけかた、分列行進の訓練ばかりで期待していた三八式歩兵銃にさわられるのは上級生だけ。軍国少年にとってはこれも至極残念なことであった。

「教練」の向こうを張って「習練」という聞き慣れぬ学科が新設された。これは校舎の隣の谷間の栗原牧場という乳小屋から校庭の学校農園まで牛の糞を大きな竹籠のバスケに山盛りにして運び腐葉土に鋤き込むのだ（「バスケ」とは「バスケ」が訛ったヨコハマ・イングリッシュだと英語の先生が教えてくれた）。かなり重いので前後二人のペアだが前の方はお荷物が後ろだからいいが後役になると運搬中とともに香水が襲って来る。いつも一回ごとにジャンケンで前後を決めた。監督は戦後に藤沢市の市議員に立候補するような面白い先生だったが新任早々のせいか専門教科と無関係の仕事を押つけられてお気の毒であった。生徒たちは同情と敬意をこめて「バスケ先生」と呼んだ。

創立以来「ハマの学習院」と自他共に許すリベラルな校風がまだ温存されていて、教師も教官も上級生も鉄拳を振うことなど全くなく、バスケの件を例外とすればジェントルマン養成所の雰囲気があった。ある教官ドノは雨天の座学のときにノモンハン事件でのご法度のはずの対ソ連軍完敗体験を語り（国民も薄々知っていたが）必要なのは精神より技術と物量だ、と平気で言って生徒たちをヒヤヒヤさせた。もう一人の中尉さんはザキの鞆屋の若旦那だから勤務明けにはお客に頭を下げている姿がよく見られた。どうにも締まらないオジサンたちで、よその学校の気合の入った青年将校のシゴキとは大分様子が異なっていた。周囲の山手の丘は女学校だらけでその中の唯一の県立男子校である。他校の硬派諸君からやっかみ半分に軟派野郎と白い目で見られたのも無理ではなかった。余談だが入学早々応援歌とともに上級生から伝授される愛唱歌「豪気節」（ひとに知られし横浜の九つ高女の教えうた、そいつは豪気だネ）は同級の岩永正矣が戦後まで記憶しており、もう一人の畏友の好著「斎藤秀夫著作集」に収められている。正史に盛り込めぬ末端少年たちのホンネの声であり、しかもお固い専門史書に収録されているのは実直一筋の他校に見られぬ柔軟さの産物として評価されるべきであろう（記録者岩永は自宅が学校近くの仲尾台にあったから後述の学徒勤労働員から外されて校舎を空襲被災から護る「学校警備隊」要員として残り、大空襲で焼失後「任務終了だ」と言いながら私の職場で再会した）。

ドライトルのB25爆撃隊は蒔田の上空で目撃していたのにガダルカナル敗北は言われるがままに「転進」と思いこみ、空母四隻を失ったミッドウェイ海戦その他の凶兆も軍艦マーチにつられ、小学校卒業式の答辞では「大本営発表の戦果に沸き立つこのよき日に……」など嘘っぱち作文を読まされていた。それから一年も経たないのに陸海軍報道部発表の音楽にも「海行かば」が増え、急速な戦局悪化は中学生にも感じられるようになって来た。遅ればせながら今はあのノモンハンと同じ状況なのだ気づいたのである。学園中に悲壮感が漂い始め先生もゲートルを巻き、体育の定番だった「女学校巡りマラソン」のかわりに木銃で藁人形への刺殺訓練、「軍人二賜ハリタル勅語」の暗唱に精を出す日々へと変わってしまった（それでも他校のよ

うに予科練に応募しろなどと一度も聞いたことの無かったのは先生たちのささやかな抵抗だったのであろう）。

「学徒勤労働員令」というのが施行され、まともに学校に通ったのは二年生のはじめ頃までである。紳士のタマゴたちは厚木や海老名の農家の「下男」に身をやつし畑の草取りや田んぼの稲刈りに送り出された。農家には当り外れがあり「買出し部隊」がサツマ芋の代金代わりに献上する振り袖や羽織をせっせと溜め込む家もあれば「都会の坊ちゃん」たちの瘦せた姿を見かねて土曜の帰宅時にお米を雑糞に詰めてくれる家もあった。

農閑期には水取沢や峰の山奥で松の根っこ（航空燃料抽出の原料）の掘り起こしに汗を流した。食糧は運配欠配の連続だからどこの家も隣組長が配る南瓜の苗を大事に育てツルまで雑炊を増量する材料にしていたが、三食とも白いメシにありつける農家の応援には大喜びであった。それに比べ炎天下の根っこ掘りと来たらハラを空かすだけで見返りのない単純重労働。それでも硬派の学校と隣り合わせになったときなど、軟派だってやるときにはやるんだ、と汗まみれ土まみれで意地を張った。もっとも「マラソン訪問」したエフ（フェリス）やラン（紅蘭）やリツ（共立）の女学生たちがスカートをモンペに置き替え近くで作業していたせいもあったが。

都会中心地の学校らしい格別なこととしては住宅密集地区の強制疎開家屋の破壊作業があった。今は市営バスの路線になっている根岸・磯子・滝頭方面の幹線道路はほぼ私たちの仕事の「成果」である。

平屋は簡単だが二階建ての本建築は手間がかかった。まず大黒柱の根元にノコを入れる。小柄の生徒が二階の屋根裏に入り親柱のてっぺんにロープを巻きつける。それを窓から放り出し下で待っている連中が大声で引っ張り倒すのだ。大量のホコリを噴き上げ大音響とともに崩れ落ちる。檜の一枚戸も銘木の柱も頓着なし。当時の壁は土とワラを捏ね合わせた泥を編んだ割竹に練り込んだもので、粉塵防止の放水や遮幕など考えもしない時代だから肌着まで忽ちザラザラになる。待機中の海軍トラックが太い柱や厚い板だけ選んで早々に横須賀街道を南下する。それが三浦半島沿岸の陣地構築の材料になることは誰でも知っていた。

兵隊たちが見えなくなると突然現れるのが近所のオカミさんの大群で、トラックが積み残した廃材を木っ端ひとつ残さず奇麗に持って行ってくれる。こちらとしてはあと片付けの手間が省けるから大歓迎だ。燃料不足の毎日、これで今夜はお風呂に入れる、と大収穫に目を輝かしている。みんな自分の家族のことだけで精一杯で、たまたま役人の線引きに入ってしまったお隣りさんの不幸に同情する顔などどこにもなかった。戦争は長年のご町内の暖かい連帯を抹殺して突き進んで行った。

不謹慎な話だが、かく言う私たちにとっても家を壊す作業などめったにない体験だから面白くないはずがない。一週間前までどんな人が住んでいたか考えていたら仕事にならない。戦争に勝つためにはつまらない同情など禁物だ。

あまり豊かでない長屋を壊したときのこと、座り机があったあたりの壁にお習字が剥がされず貼ってあった。持ち去る暇がなかったのか、よく見ると小学校低学年の女の子らしい。先生がつけてくれた三重丸がはつきり残っている。この子はこれが自慢で壁に貼ったのだろう。赤丸を見た母親はご褒美に焼きいもでもくれたかもしれない。とたんにガランとした空き家人間の匂いが立ち込めて来た。それから暫くのあいだロープを引っ張るのに以前のような大きな声が出せなかった。

戦後この地区のある座談会に強制疎開の憂き目に会った床屋のご主人がメンバーにおられた。床屋なら部屋のつくりも特殊だから記憶にある。もとの場所を確認したらやはり私たちが壊した中の一軒だ。さんざん愚痴ばなしを聞かされたあげくつい「オタクの店は私が潰したんです、ごめんさい」と謝ってしまった。なにオレが命令したわけじゃあるまいし、当時の中学生が謝罪するなんてスジ違いと思ったが後の祭りだった。

学徒動員が本格的になり危険を伴うようになったのは敗戦の年に入ってからだ。学年別に配置先が決められ十人単位で別々の職場となる。シフトが違うから広い工場の中で顔を合わせることもない。私たちが着任したのは川崎駅西口に接する東芝電気の堀川町工場、今はすっかりニュータウンの高層マンション群となり昔の面影は全くない。素材製造部伸線科という職場で電波探知機の真空管フィラメント用にタングステンとモリブデンの粉末から細い線を造り出す一貫作業だ。効率を上げるため昼夜三交替制で、昼間は近県から徴用で連れて来られたそば屋か小間物屋のオヤジさんたちが勤務するのだが慣れない作業で動作は至って鈍い。付近の陣地から兵隊さんたちも応援に来てくれているのだが、鉄砲は無いらしいし腰のゴボウ剣は竹製といういたらく。組長・伍長の役付職員は兵隊にも取られない年寄りか半病人ばかり。中学生は夕方出勤し、深夜仮眠して朝までの連続夜勤を文句も言わずやってくれる。女学生は二階で小型機械を懸命に操っている。工場の責任者にとって動員学徒こそ唯一の希望の星に見えたであろう。

出勤時には正門に東芝吹奏楽団が団服で整列し行進曲「はやぶさ」で景気をつけてくれた。戦後一度も聞いたことのない曲だが毎日のことだから今でも口ずさむことができる。「学徒動員の歌」も生徒らの愛唱歌で分列行進しながらよく歌った。

花もつぼみの若櫻
五尺のいのち引下げて
国の大事に殉ずるは
われら学徒の面目ぞ
ああ、紅の血は燃ゆる

「国の大事」とは「この戦争」であり「殉ずる」とは「自分の生命を天皇と国に捧げる」ことなのと言うまでもない。最初のうちは死ぬのが怖くて恐怖心を押しつぶすため大声で歌っていたが、次第に「賛美」に代り、やがて「甘美な幻想」にエスカレートしていった。平和な時代なら集団催眠とか洗脳とか言われるのだろうが、「死」という未知のものについて自分なりに納得できる筋道を考えておかなければ一日を送れない。こうして粘っこい空気の中でいつしか死ぬことは睡眠や用便と変わらぬものになってしまった。今でもインターネットの「戦中愛唱歌」などでこの歌の「殉ずる」の言葉を聞くと八十年もの昔の情景がセピア色の写真のように浮かび、年甲斐もなく臉が熱くなってしまふ。戦争や音楽はかくも不思議に人間の精神構造を狂わせ意図する方向に硬直させてしまうのだ。

敗戦の年になるとB29による空襲は日常茶飯となり、これに近海まで押し寄せる空母の艦載機グラマンが加わって来た。夜勤作業もままならず警報のたび地下二階の変電室前の闇にうづくまっても炸裂音と振動が遠くから伝わって来る。民家なら焼夷弾で静かなものだが工場や軍の施設は当然爆弾だ。今のあの音で何人死んだのだろう。新聞はあいかわらず「昨夜またも川崎方面を盲爆」などとバカな記事を書くだらうが、ここは工場の密集地帯だ。狙わなくたって大量にバラ撒けばどこかに当たるに決まっている。頼みの綱は各階の床と天井の厚みしかない。「あの音は川鉄（日本鋼管川崎製鉄所）だ」「いや鶴造（同鶴見造船所）の方向だ」と当て推量が続く。「今夜は海べりが目標だからこっちまでは来ない」という上役の言葉を無理に信じ眠れない仮眠の毛布をかぶった。

五月二十九日の横浜大空襲のときもいつものように前日の昼間は自宅休養で夕方から出勤。翌日の朝になって帰宅しかけたとき横浜中心部が目下空襲を受けており電車は不通との連絡が入った。仕方なしに南の空を眺めているうちに俄かにあたりが暗くなり、やがて黒焦げの紙が無数に降り始めた。言わずと知れた横浜大炎上の証拠品である。空き地が灰で見えなくなり、私たちはその中にわが家の分も入っているだろうと気を揉むだけだった。

昼過ぎにやっと帰宅の許可が出たがあいかわらず電車は動かない。仕方がないので家の近い者どうしが一緒に線路の上を歩いて帰ることにした。

焼野が原になった鶴見を過ぎ東神奈川の駅付近では炎上中の電車の列から無事な車両を切り離すのを手伝ったが、道すがら線路の端に焼死体がいっつも藁ムシロをかぶったまま放置されているのを見た。わが家もダメだと思ったのは桜木町駅近くから伊勢山に登りお不動様から眼下を見下ろしたときである。広々とした空の下に残っているのは白と黒にカモフラージュした野沢屋・寿・松屋の鉄筋デパートと海岸通りの官公庁だけで、まだ煙がくすぶっている。焼け崩れた木造家屋で覆われ江戸時代の平らな姿に戻った吉田新田に大岡川と中村川が地図で知っている通りはっきりと川筋を見せていた。

慣れるとはおかしなもので半日も死体を見ているとムシロからはみ出した真っ黒な手足にも半狂乱の老婆にも感情が動かなくなる。前線での兵士たちの神経もこれだな、と思った。それでも日之出町から長者町への道を選んだから良かったものの後で知った京急黄金町駅階段の、その時刻にはまだ片付いていない市内最大の死体の山を見ていたらどうだっただろうか。

岡村の自宅方面は蒔田の丘に隠れて見えないが、この分では焼け残っているはずがない。磯子方面組全員うなづきあって重い足を動かした。不安が驚喜に変わったのは天神橋あたりに来たときである。この周辺から先は民家が健在ではないか。足取りが急に軽くなり家のまわりが視野に入ったときは思わず溜め息が出て力が抜けた。汗まみれの顔を手拭いで拭いたらまっ黒だった。母が道ばたに立ってこちらを見てあんぐり口を開けている……。

その夜は焼け出された親戚知人が生き残った家族を連れて次々と押しかけ、わが家は廊下まで足の踏み場がなくなってしまった。気のいい両親がヤミで買った取って置きの缶詰でもてなしたが誰も話す元気がない重苦しく暑い夜であった。

話が前後するが、命じられていた作業の説明をしておこう。まず高温高圧で原料をプレスして細長い棒をつくる。それを灼熱し最初は大型ハンマーで叩きながら伸ばす。次第に穴を狭めた十数個のダイスに通して引き抜き徐々に細くする流れ作業で「ラージ・ドロ잉」と呼んでいた。引っ張るのは機械がやってくれるがダイスの穴に通すにはワーヤーの先端をヤットコではさみ、沸騰する坩堝に浸して細くなるまで溶かさなければならぬ。単純な作業だが重いリールと高熱の炎が相手の前工程はかなりきつく、手が滑ってリールを足の上に落せば忽ち骨折である。厚い手袋でガードしているものの坩堝の硝石に不純物があれば爆発して高熱の火の粉があたりを飛び散るから火傷はひっきりなしだ（長時間バーナーに手をさらすから毎年厄介なものだった霜焼けがすっかり治ったのが皮肉であった）。後年テレビ神奈川の社長になった級友の吉田次郎は谷津坂の大日本兵器で最新の旋盤を当てがわれていたが、戦後「オレは会社をクビになってもバンコ稼業で食って行ける」と威張るのが常だった。こっちのような線引き屋にはそれも叶わない。それに真空管などとくに昔ばなしだ。吉田の話にはつくづく羨望を禁じえなかった。

工場での問題は大量に使うガスの供給で、戦況の悪化に比例し日増しに減って来るのである。出勤のとき電車が川崎駅に近づくとまず遠くの東芝のガスタンクを目で追う。黒々とした勇姿を見せる日が稀となり、鉄骨のフレームが骸骨のように夕陽を浴びて中空に取り残されていることが多くなってきた。

ガスがあっても材料の無い日、材料があってもガスの来ない日がある。空襲がない日でも焼け跡の瓦礫の片付けに回されたから仕事をしないわけではなかった。工場の中が終わっても周辺の片付けは絶えることがない。空腹での土方作業には参ったが、少年であろうと名誉の「産業戦士」で大人なみの「労務加配米」がある。麦混じりの米飯をむさぼり食べた。

動員ではるばる来ていた新潟の長岡工業専門学校の兄貴分が休憩時間に数学や物理を教えてくれた。いずれ空襲で死ぬのに今さら勉強したって……という気もしたが、ものを覚えるのは楽しいし学生としての充実感があった。その兄貴が広島に「新型爆弾」が落とされたニュースを聞いていっぺんに顔色を青く

した。巡察の憲兵に隠れてこっそり私たちをものかげに呼び、これは原子爆弾というもので世界中で研究を進めていたがアメリカがとうとう一番乗りをやった、と言ってその原理を説明してくれた。難かしくてよくわからなかったが、どうも政府の言うように白い布を被っていれば大丈夫なんてものではないらしい。「ああ、これで……」と彼は苦い顔であとの言葉を呑み込んでしまったが、なにを言おうとしたのか私たちにはよくわかっていない。

ガスも材料も来ない、電気も非常灯だけだったので作業台の掃除をしていると派遣兵士の隊長の中尉が全員召集の号令を飛ばした。焼け跡の空き地で軍事訓練をすると言うのである。なにもやる事が無くブラブラさせておくと士気を損なうと思ったのであろう。話に聞いていた敵の戦車のキャタピラの下に座布団地雷を抱えて飛び込む訓練だろうと想像しながら列を作ったが、なんと分列行進の練習だという。中学生ながら軍人の頭を疑った。こんな初歩は学校で一年生のとき散々やったことだし、今の時期になにを、と思ったときサイレンも鳴らないのに突然ビルの合間で急反転した灰色のかたまりが爆音をたてて突っ込んで来た。尖った機首、角ばった翼端、間違いなく殺し屋P51ムスタングだ。

硫黄守備隊が玉砕してからはそこを基地としマリアナからのB29の護衛が専門だったが、夏前には京浜地区の殆どが焼き尽くされていたので目標も地方都市に移り小型爆弾と機関銃の戦闘機だけの行動が増え、動くものなら何でも狼のように襲いかかっていた。いまそいつが真正面から飛び込んで来る。中尉が慌てて「退避！」と叫んだが防空壕までは十メートルもあって時間がない。すさまじい射撃音が耳をつんざく。なんとか機首正面だけでも避けようと横っ飛びに地上を転げた。ズック靴の先を銃弾が白い砂煙を上げながら走る。爆弾はどこかで使ってしまったのか機関銃だけだから助かったが爆弾を抱えていたらと思うと肌粟が立った。敗戦まであと僅か三日という瀬戸際の日のことであった。

八月十五日の「玉音」は昼寝を中止し故障しがちな自宅のラジオで近所の人たちと一緒に聞いた。雑音の間にやたら難しい言葉が続くが一年生の時の漢文の読解力が役に立ち、日本が負けたことはすぐわかって老人たちに説明してあげた。いっせいにヤレヤレ……という顔が揃った。敗戦は予想していたから意外ではなかったが、オレはどういうわけか今ここに生きている。感覚が麻痺してしまったり嬉しくも悲しくもない。ただ深く重い虚脱感があるばかり。もう爆弾も機銃掃射もない、死ななくてもいいという事実がどうしても呑み込めないのだ。昨日までのオレと今日のオレとなにが違うのか。十五歳のニキビすらで死ぬことばかりどうしてあんなに考えていたのだろう。鏡を見てもそこには子供の顔がなく一年のあいだに十年も歳を取ってしまった類のこけた男がいるだけだ。数日後に二重橋広場の土下座写真を見たが天皇に申し訳けないというような殊勝な気持ちは全く起こらず、こんな貧相な声を出す男のためオレは死ぬ覚悟までしていたのか自分を不思議に思い、次いで無性に腹が立ってきた。

翌日は朝早くからこれほど残っていたのか驚く数のゼロ戦や雷電から双発の夜間戦闘機月光までが横浜上空を乱舞したが、国民に決起を促す檄文を散布する厚木航空隊の低空飛行であった。「降伏は君側の奸、重臣たちの陰謀である、国民諸君われら海軍航空隊とともに戦え！」というガリ版を読んでも「やりたいヤツだけで勝手にやれ」と吐き出すだけで一人として動こうともしない。工場に行ってみれば止まったままの機械の下で時間を持てあました連中が雑談にふけており、例の中尉が軍刀を振りまわして暴れた話で持ち切りであった。こんな白けた空気のまま長く暑い夏が終わった。

皇国少年の心身はいつからともなく蝕ばまれていた。原因のわからぬ熱が出て何をやるのもいやであった。学校も焼けてし

まったしクラスの仲間とも連絡がつかない。食欲もなくただ寝るだけの日が続く。医者は静かな空気のいいところで栄養をつけろと無理を言うばかり。母親も心配して静岡県の実家に移って養生を、と言う。なによりも「労務加配米」なんて夢のまた夢。富士山の麓の文字通り山紫水明の町で水道は雪溶けの水だからめっぽう旨いところである。毎日のように餓死者の記事が新聞に出る横浜にいたところでどうなることか。だいぶ気持ちが動いて来た。

十月になってやっと乗車券が手に入り混み合う列車に窓から乗りこんで田舎に帰る。姉の子とは言いながら一家としてはとんだ厄介ものだったろうに、叔父始め家族のみんなが同情していたわってくれた。

専業農家だから人手がほしい。体調が落ちついて来たので畑仕事を手伝うことにする。まともに食事ができて体を動かしたのが回復を早めたようだ。横浜で敬遠していたパイスケ仕事も思わぬところで役に立つもので軍手さえあれば牛糞も馬糞も苦にならない。叔父が都会の子にしては上出来、と褒めてくれた。この叔父が苦勞して校長宅や教頭宅に白米を運んでくれた賜物だろうか、疎開や焼け出されて満員のはずの県立F中学の三年に編入できたのもラッキーであった。

横浜からさして遠方でもないのに箱根山を越えると風景がすっかり変わる。学校でも妙なことがあるもので、東京からの転校生が大勢いるのだが、彼らはいじめられるか無視されるかどちらかの箱に収まっている。ところが横浜からただ一人やって来た私には教室で紹介されたときから奇妙なほど親しげな、尊敬とも憧れともつかぬ眼差しを送って来るのだ。鉛筆もノートもなく教室で手ブラの私の机に文房具が次々届く。気味悪さに慣れたころわかったのだが、彼らネイティブ中学生にとっては東京など大きな田舎町に過ぎないが横浜は日本ばなれした別次元の空間に見えるらしい。そこから突然舞い降りて聞かれるまま外国船の出帆風景やオデオン座のオクラホマ・キッドを語る私はまさに「風の又三郎」なのであった。横浜の中学で僅か一年間の勉強だったが、そこで覚えた英語の発音はこの教室の英語とかなり違った響きであり、指名されてリーダーを読むときなど先生や同級生からの特別な視線を感じた。三中のころの英語の「スケちゃん」先生の顔がずいぶん偉い人のように思い出されるのであった。東京からの同級生に比べれば住み心地が格段にいいはずなのになぜか嬉しくない。横浜には二度と帰れないかも知れなかったのが彼らが欲しがるままに徽章もバッジもみな進呈してしまった。

ようやく体調も回復したし横浜も落ちついてきたようなので先々のことを考え五年生に進むとき古巣の三中に復学（校舎が焼失してしまっているの卒業まで間門小学校に居候）するのだが、井戸の中にいたのではわからぬ「横浜」という町の奇怪さを田舎の町で実感し（横浜の人たちは奇怪どころか未だにそれをプライドにしているようだが）、後年に歴史を勉強し始めるときの立ち位置として寄与してくれたのは有り難いことであった。

もう一つ、田舎の中学で、これはあまり楽しくない経験だったが、戦地から復員し復学した上級生の中に予科練特攻の生き残りが何人もいて、放課後に連日私たち後輩を校庭裏の川原に連れ出し殴ったり蹴ったりさいなむのである。少し前まで彼らの誇りだったイカリのついた作業帽をペテン帽のように折り曲げ「お前ら娑婆でノンビリ暮しやがって……」とわめきながら私たちをなぎ倒す。予科練行きを熱心に勧めたであろう教師たちは遠くから眺めているだけで何も手出しが出来ない。それに横浜と違ってこの生徒は昔から鉄拳制裁に馴れていたのか、誰ひとり反抗する気配のないのも情けなかった。

たしかにこの辺の町には空襲が無かったし、生徒の家は農家が多く飢えの心配からも無縁であった。同じ頃の彼ら予科練生が出撃の前に酒や麻薬を呑まされ女を当てがわれ、死ぬのは明日かあさってかという地獄体験から祖国に帰還して後輩たちの幸福な戦中生活や敗戦日本の今への無邪気な同調を見れば腹に

据え兼ねるものがあったのであろう。殴り倒されながら私は心の中で呟いていた「オレだって君たちと同じように死ぬか生きるかの境い目にいたんだから同類じゃないか」。しかしまたこうも思うのだった。「オレには家族や友人や先生がそばにいてくれたし、死ぬときも一人じゃなかったはず。この連中の孤独な日々には比べれば本当に同列なのか……」と。

リーダー格からの一発が左頬から鼻にかけて命中し口の中が生温いもので溢れた。激痛に顔しかめながら半年前の川崎での日々を思い出す。あのときムスタング野郎のタマがアゴに当たったらこんな感じがしただろうか……。続いて足蹴りが来る。砂利混じりの地面に吹っ飛ばされ他愛なく伸びてしまった。仰向けの目に横浜の灰色の空がボヤけて見える。焼夷弾で丸焼けになっているのだが、まだ意識があるようだ。もうすぐ死ぬのだろう、早く誰かムシロを掛けてくれ。「殉ずる」の文字が浮かんで消える。隣りに倒れている級長の口が急に耳元に近づいた「ヤツらが本当にやりたかったのは××なのに」と遠くで立っている国漢の教師の名を呼び捨てにするのがわかったが、私にはそんなことはどうでもよかった。

足を引きずりやっとの思いで暮れ方の家に戻ったが、途中の商店のガラス戸に映る顔は予想通り見られたものでない。幸いに今日は休電日で家の中には蠟燭が灯っていてその暗さに助かる思いがした。叔父一家に余計な心配はかけたくない。なるべく家人に見られぬように顔をそむけ、早々と机に戻って蠟燭を消した。

町には「天皇の戦争責任を糾弾する」というポスターが溢れ新聞はこぞって昨日までときめいていた人たちを犯罪人として弾劾していた。部落で一番の親孝行と言われた復員軍曹が八路軍捕虜の斬首写真を得意げに子供たちに見せびらかし、武功も戦争犯罪も弁別できぬ愚行を演じていた。無秩序・無責任・無思想の氾濫である。嗜虐のあの上級生たちにしても、あるときは生ける神様扱いにされ、あるときは筋金入りの古参兵曹に「海軍精神注入棒」で叩きのめされ、内部の傷と精神の感乱を抱えたまま戦後社会に適応するすべもなく腕力以外に自分を認めていないのかも知れない。「もと予科練」たちもいずれは「予科練くずれ」「ヨタレン」と呼ばれるゴミ箱の中に投げ捨てられるのであろう。なにが実像でなにが虚像なのか、加害とは被害とは……鈍った頭では考えが續かない。日本人のすべてが座標軸を失っていた。冷やした手拭で頬を抑えながら、この痛さを死者たちへの供養、生き残った軍国少年のせめてもの帳じり合わせにすることにした。

小さな田舎町も国鉄の駅には赤旗がひるがえり、全国を大混乱に捲き込むであろう「二・一ゼネスト」を控えてどこもかしこも騒然としている。まだ痛む足をさすりながら窓を開け、星のない空に「これでオレの戦争はおわり……」と呟いていた。

2024. 3. 10 (東京空襲の日)

第二次 2024. 3. 10
「かおす通信」第四号 (通巻55号)
発行 ~~かおすの会~~
代表 葛城 峻
〒235-0021
横浜市磯子区岡村3-12-16
☎090-1429-1701